

# 天理教 江南支部だより

発行先 江南支部  
発行日 立教187年8月1日  
発行責任者 福西 努  
発行住所 甲賀町上野461番地9

8月号 N0289



## にをいがけ勉強会 8月31日 (土)

講師 : 村田幸喜先生 (本部布教部布教二課長・満州眞勇分教会長)

会場 : 教務支庁

時間 : 受付9時半より 開会10時 閉会15時

内容 : 午前 講話 午後 にをいがけ実働とねりあい

参加お供え 500円 (昼食代含む)

申し込む : 8月20日締め切り



### 「西2駐車場」改修に伴う 全面封鎖について

西2駐車場は、舗装整備工事のため、本年8月7日から年末まで全面封鎖となります。工事期間中は、「北3」「北4」「北5」など、他の駐車場をご利用ください。

“真実の願い”は埋もれない

人間には誰しも欲があります。欲のない人間はいないと神様は仰っていますし、生きるうえで必要な欲もありますから、ある程度は許されていると考えてもよさそうです。

ところが、私も含めて、人間というものは欲深くて厚かましい。それが一番分かりやすく現れるのは、おつとめの拝礼の時間です。このとき、親神様に、あれもこれもとたくさんお願いする人がいます。大祭や月次祭には、何万人もの信者さんが帰参しますから、親神様はもう大変です。大勢の人がいっぺんに、ああしてください、こうしてください、なかには「もつと美人にしてください」「脚を長くしてください」なんてお願いをする人もいたりして……。私が神様だったら、きつと嫌になると思います。

けれども、そのなかから「私のこと

はどうでもいいのです。困っているあの人のことを、どうかたすけてください」という声が、スーッと聞こえてきたらどうでしょうか。

「ほしいほしい」と求めてばかりいる人と、「あの人をたすけてください」と祈りを捧げている人とは、おのずと雰囲気違いますよね。だから、後者のような“真実の願い”は、どんなに大勢の人がいても埋もれずに、親神様のもとに確実に届くと思うのです。

同じように、親神様は私たちの行動もご覧になっています。自分のたすかりのために神殿へ足を運んで、おつとめを勤めているのか。はたまた、人さまのことを思い、回廊拭きやトイレ掃除などのひのきしんに励んでいるのか、すぐにお分かりになることでしょう。

冒頭でも述べましたが、多少のお願いならいいと思うのです。私も、膝が痛い、ちよつと風邪っぽいなど思ったら、痛みを取ってください、熱を下げてください、などとお願ひすることはあります。

それでも、自分のことは後回しで、まず人さまのために心を使い、行動させていたたくお互いでありたいものです。そういう通り方をしていると、自然と心が勇んできます。

「おふでさき」に、  
をやのめにかのふたものハにち／＼に  
だん／＼心いさむばかりや（十五 66）  
とあります。

「きようはどんなことをさせていたただこうかな」と思って、日々通らせていただく。それが結局、自分自身がたすかっていく姿につながり、「人たすけたらわがみたすかる」の教えを、心から分らせていただける通り方となるのです。



みんなの教理勉強  
だめの教えつて素晴らしい

だめ（究極）の教えの何と  
ありがたいことか！

はじめで、生き抜く殉教の道を  
教えられた

「殉教」と言うときリキスト教を思いだすが、イエスは殉教をすすめていない。信仰者の理想の姿として、十六世紀のキリシタンの殉教が讃えられる。どの教えでも、殉教者は尊敬され讃えられる。

しかし、「マタイによる福音書」には、「一つの町で迫害されたときには、他の町へ逃げて行きなさい」と書いてある。生命を捨てるのが信仰熱心の証という信仰は、少なくとも新約聖書にはない。

キリスト教で殉教が始まったのは、西暦三十年代の殉教者ステファノの時からであると言われている。

殉教はその頃から、イエスの受難死になぞらえられ、殉教したら天国行き

のパスポートを手に入れることが出来るという信仰が生まれた。

むやみに殉教することは、生命の無駄ではないかという見方もできる。生き抜いて教えを伝え、信じるこのの方が大切である。

トインビーは、ローマの裁判官たちが、死刑を宣告したがいながらなかったのに、キリスト教徒はわざと死刑判決が出るようにと熱心に願ったと書いている（トインビー『現代宗教の課題』）。

お道では、笑われそしられても、「はいはいと這い上がれ」と教えられ、どんな厳しい迫害を受けてもじつと耐えしのんで生き、やがて相手が成人して自分の過ちを認めるまで待ち、耐え抜く信仰を教えられた。親神さまは必ずおたすけくださることを信じて、我慢し、耐えしのび、生きつつ行う殉教を教えてくださいましたのである。

道の先人は生きながら殉教の道を歩まれたのである。

教祖が定命を二十五年縮めて現身を隠されてから、急速に教勢が拡大する

につれて、檀家をとられたと怒り狂う仏教勢力や患者を取られると怒る医師たち、それに新宗教の急速な拡大を警戒する政府と官僚、マスコミが一体となり、天理教撲滅運動を全国で展開した。明治二十九年には内務者はひそかに全国の警察当局に、天理教を厳重に取り締まり、制圧せよという、いわゆる「秘密訓令」を出した。

明治四十二年の国会でも衆議院で、天理教を解散させる法案が通ったが、貴族院で審議未了となった。

このような過酷な迫害、統制、強圧の中で数百万の信者の信仰の燈を消すまいと必死に努力され、ひそかに千回泣いたと洩らされた初代真柱様は、まさに生き抜かれた殉教者であった。

二代真柱様は若くして真柱（当時は管長）となられたが、昭和十年代に、国がしだいに軍国主義国となり次々と教義や祭儀に干渉し、統制と管理を強化してきた。全世界を相手にする大戦中、軍や政府は本教を解散させようと

した。しかし六百万の熱烈な信仰集団を潰せず、いろいろと無理難題な協力を命じてきた。それに対し、筋は通しつつ協力を最小限にとどめ、信仰の火を消すまいと、必死に耐えしのび、本教を存亡の危機から守り抜いてくださったのである。

中尊寺の元管主で作家の今東光師こんとうこうは、本教が潰されなかったのは奇跡であると、幾度も言っている。

教祖は「たにそこせりあげ」の生き方を教えられた。

どん底のような厳しいところにおいても、決してめげず、屈せず、ご守護を信じ、希望と夢をもち、勇気を出して信仰一すじに生きぬく生き方を教えられた。どん底からやり通す覚悟をもって、こわいものなしである。谷底から、高山に登る夢と希望が湧き上がってくる。

どんな苦難や悲劇に見舞われても、決して絶望せず、雄々おおおしく生き抜く道を教えられたのである。



滋賀教区啓発委員会は、7月4日、本年度の現地研修会を実施。本年は、岐阜県加茂郡八百津町にある杉原千畝記念館と関ヶ原古戦場記念館を見学した。

杉原千畝は、第二次世界大戦中、ナチス・ドイツに迫害されたユダヤ難民6000人にビザを発給して命を救った人で、東洋のシンドラと讃えられる。



江南支部は、7月4日、第2回目の鹿深の家ひのきしんを実施した。

**次回は、8月10日午前9時～11時半です。**

**8月支部にをいかけデー**

**日時：8月28日午前9時～**

**拠点教会：稗谷分教会 甲南町稗谷696番地**

